

＜総括＞

出題数	現代文（言文一致体の文章を含む） 2題 現・古・漢融合問題 1題	試験時間 90分
-----	-------------------------------------	----------

（一）について。昨年度同様、現代の文章（A）と古い文体の文章（B）とが並列された形式の出題であった。Aは、幸徳秋水と中江兆民とに関する「漢文」や翻訳をめぐる文章であった。それほど読みにくくはなかったと思うが、いくつか解答しづらい設問があった。
Bは、幸徳秋水が師の中江兆民について語った文章であり、近代文語文というより言文一致体の文章であり、昨年度より読み取り易くなっただろう。
（二）について。昨年度同様、平易な評論が出題された。設問も解きやすかったであろう。
（一）・（二）全体を通して。読む量が多く解答時間が足りなかっただろうが、文章自体としては昨年度より易化したと言えよう。

＜本文分析＞

大問番号	（一）	（二）
出典 （作者）	A 梅森直之「秋水の兆民、兆民の秋水」（『兆民先生 他八篇』 岩波書店 2023 年） B 幸徳秋水「翻訳の苦心」（『幸徳秋水全集 第六巻』 明治文献資料刊行会 1968 年）	畠山直哉「写真はイメージです」（『ユリイカ』 54 巻 7 号 2022 年 6 月）
頻出度合 ・的中等	Aは、入試では稀な筆者である。 Bは、筆者は著名だが、出典は入試では稀。	入試では稀な筆者である。
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約 6250 字 (A 約 4150 字、B 約 2100 字)。 昨年より約 100 字減。	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約 2600 字。昨年より約 150 字増。
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
(一)	A 秋水・兆民に関する文章 B 翻訳論	問一	マーク	標準	空欄補充問題。空欄Ⅰ「光陰」は時間という意味をもち、時間を「費す」という内容は、文脈上も妥当である。
		問二	記述	標準	空欄補充問題。本文4行目「慰みの為にのみ読書をなす」と空欄Ⅱ直後の「なす」との対応から考える。
		問三	マーク	標準	傍線部内容説明問題。傍線部1の6行後からの内容に基づいて考える。
		問四	マーク	やや難	傍線部内容説明問題。「漢文という世界」と「翻訳語の創出」との関係について述べている、Bの文章の傍線部6の後の段落に即して考える。
		問五	マーク	標準	傍線部内容説明問題。「之」の指示内容、接続助詞「ば」、「雖も」の意味、「～す可からざる者有らざる」(二重否定)の意味を捉える。
		問六	マーク	標準	傍線部内容説明問題。傍線部直後から、本文の最後までの内容と合致するものを選ぶ。
		問七	マーク	やや難	傍線部の表現に関する問題。紛らわしいが、傍線部5の次の段落に「訳語撰定の困難」とあり、その二つ後の段落には「其文勢、筆致をも写さねばならぬ」とあり、「三つ」の「困難」が語られていると考える。
		問八	マーク	標準	空欄補充問題。傍線部4の5行前や「兆民の教え」と対応する空欄Ⅲの4行後などから考える。
		問九	マーク	やや難	文整序の問題(空欄補充型)。紛らわしいが、空欄Ⅴの前後とのつながりを考え、かつ空欄Ⅴ直後の「文章の晦渋」と「原意を勝手に改作する」とに分けて考える。
(二)	写真論	問十	マーク	標準	空欄補充問題。空欄Ⅰの後にある例の内容と対応するものを選ぶ。
		問十一	マーク	標準	文整序の問題(空欄補充型)。②の問題提起に対して、①がそれを受け、③・⑤が①の理由だというつながりを考える。
		問十二	マーク	やや易	空欄補充問題。空欄Ⅲの直後に「時間」の話題があることを踏まえつつ、消去法で考える。
		問十三	マーク	やや易	傍線部理由説明問題。傍線部前後の「記号」の説明に当たる部分を根拠に考える。
		問十四	マーク	やや難	空欄補充問題。「イメージ」に該当するものを選ぶ。傍線部Aの1行後や傍線部直後との対比が手がかり。
		問十五	マーク	標準	趣旨判定問題(合致しないものを選ぶ問題)。Ⅱが空欄Ⅳの直後の内容と合致しない。
		問十六	記述	標準	漢字の書き取り問題。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

多様なジャンル、いろいろな文体の文章に慣れ、内容の理解に努めるとともに、設問の要求を見抜く力を身につけなければならない。(一)のように、文章を並列する形の問題では、文章同士に共通する話題やテーマを意識して読んでいこう。今後も文語文の出題の可能性があるので、古い文体の文章にも触れておきたい。語彙に関する知識も要求されることがあるので、概念語や慣用表現などにも習熟しなければならない。また記述問題も出題される可能性があるので、その練習も怠らないようにしたい。

国語（融合問題） 早稲田大学 文化構想学部 4/5

<総括>

出題数	現代文（言文一致体の文章を含む） 2題 現・古・漢融合問題 1題	試験時間 90分
-----	-------------------------------------	----------

昨年度同様、(三)は現古漢融合問題であったが、現代文の中に古文・漢文が含まれている形の文章が出題された。昨年度とは異なり、甲の現代文の中に古典からの引用はあるものの、古文・漢文が独立した形で出題され、漢文は乙・丁と二題出題された。

現代文は、一昨年度のような専門性の高いものに近いもので、それほど長い文章ではなかったが、昨年度よりは読みにくかっただろう。

丙の古文は、昨年度と異なり、独立して出題された。内容説明、文法、文学史の問題が出題された。

漢文は、昨年度と異なり、独立して出題された。また、丙の文章にも漢文が引用された。

設問においても現代文・古文・漢文それぞれの正確な読解力が要求される。いずれも付け焼刃的な学習では正解は得られないので、本学部の受験者は、現代文・古文・漢文についての十分な対策が必要である。

<本文分析>

大問番号	(三)	
出典 (作者)	甲 (現代文) 倉本一宏『一条天皇』(吉川弘文館、2003年) 乙 (漢文) 『続本朝往生伝』 丙 (古文) 『今昔物語集』 丁 (漢文) 白居易「短歌行」(『白氏文集』卷六十二)	
頻出度合 ・的中等	甲 (現代文) 入試ではほとんど見られない筆者の文章である。 乙 (漢文) 稀。 丙 (古文) 頻出出典。 丁 (漢文) 稀。	
分量 前年比較	分量 (減少)・やや減少・変化なし・やや増加・増加	甲 (現代文) 約2850字 (昨年より約1500字減) 丙 (古文) 約490字 (昨年より約240字減) 丙・乙・丁 (漢文) 262字 (昨年より19字減)
難易 前年比較	難易 (易化)・やや易化・変化なし・やや難化・難化	現代文は易化。 古文は変化なし。 漢文はやや易化。

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
(三)	甲 古典文学論 乙 史話 丙 説話 丁 漢詩	問十七	マーク	標準	空欄補充問題。一条天皇が高く評価されるがゆえに、その「皇子」が嘆く際の状況を表現しうる語句を考える。 [現代文・古文]
		問十八	マーク	やや易	空欄補充問題。「淳素」の意味と、空欄Ⅱの後の一条天皇のエピソードと対応するものを選ぶ。[現代文・漢文]
		問十九	マーク	難	傍線部とその直前の文脈と的確に対応している選択肢がないが、正解の候補はハとヘになるだろう。だがヘは本文には対応するものだが、「捏造」が事実としてあったかのようなのである。またハは一条天皇の理想化のことを言おうとしているのだとしても、「実像」が「民を慈しむ」のとは異なるかのように、本文と合致しない可能性がある。決めがたいが、やむなく「かけて」という傍線部の表現との対応でハを選ぶことになる。[現代文・古文・漢文]
		問二十	マーク	やや易	文学史 (『大鏡』よりも後に成立したと考えられる作品を選ぶ)。[古文]
		問二十一	マーク	標準	傍線部内容説明問題。傍線部の前後の内容から考える。 [現代文・古文・漢文]
		問二十二	マーク	易	敬意の対象 (適切な組み合わせを選ぶ)。[古文]
		問二十三	マーク	やや易	内容説明 (乙と丙の内容の齟齬を読み取る)。[古文・漢文]
		問二十四	記述	易	返り点の問題。再読文字を含む否定形(未だ敢へて～ず)を捉える。[漢文]
		問二十五	マーク	標準	詩の句の意味の問題。対句を捉える。「青雲」と「白日」の比喻を正しく理解する。[漢文]
		問二十六	マーク	やや難	内容合致問題 (合致するものを二つ選ぶ問題)。設問文の問いかけが曖昧で紛らわしいが、イは甲の第四段落・第五段落・最終段落の内容に合致する。ヘは丁の詩の、特に末尾の二句に注目する。[現代文・古文・漢文]

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

[現代文] 古典評論や文化論を中心に、様々なジャンルの文章に取り組もう。
 [古文] 基本的な単語・文法・常識・文学史等の知識を正確に習得するとともに、その知識をもとに古文の文章を厳密に読解する学力を養っておくこと。
 [漢文] 重要単語や基本句形の学習を怠らず、文脈を正確に読み取る力を培うことが大切である。白文、漢詩、文学史、思想史に対する十分な準備もしておくこと。